あしなが第１２５６号
２０１６年2月吉日

2015年中（暦年）のご寄付者のみなさまへ

あしなが育英会
会長　玉井義臣

「受領証明書」ご送付と事業報告ならびにお願い

・あしなが運動が米国の「エレノア・ルーズベルト・ヴァルキル勲章」受章
・東北レインボーハウス竣工から2年目　遺児支援プログラム本格始動
・あしながインターンシップ生　日本遺児とアフリカ遺児のために大活躍
・アフリカ遺児高等教育支援100年構想事業　劇的に加速　米国に拠点

新年早々、悲惨なスキーバス事故で前途洋々の若者たちの命が奪われてしまいました。ご家族と友人知人のみなさま方の悲しみはいかばかりでしょうか。言葉もありません。謹んで哀悼の意を表します。

遺児家庭にとっても先行き明るい年の始めとは決して言えません。中国経済の減速で世界市場は大混乱しています。原油が大きく値下がりし回復のめどもつかないことが、資源国の経済の足を引っ張り、全世界に株安が広がり「×××ショック」で大不況になる恐れもあり、リーマンショック以来の危険信号（指標）が送られてきています。この間、階層別経済格差はますます拡大しているのは確実です。

それでも、いい話もあります。不肖私玉井が昨年10月18日、米国のエレノア・ルーズベルト・ヴァルキル勲章を授与されました。50年に亘り遺児ら９万５千人を高校・大学等へ進学・卒業させ、つどいや心塾教育、Ｐウォークなどきめ細やかなプログラムを実施してきたことが認められ、それを支える学生募金とあしながさんにいただいた勲章です。詳しくは後述いたします。

前置きが長くなってしまいましたが、ご支援者のみなさまにおかれましては、ご健勝で新年を迎えられたことと拝察し、遅ればせながら新年のご挨拶を申し上げます。日頃より、あらゆる原因で親を亡くした遺児と親が重度の障がいによって働けず、貧困状態にある子どもたちの育英事業にご支援くださっている多くの方々に心から厚く御礼申し上げます。

「受領証明書」をお届けいたします

2015年1月1日から12月31日までのあなたさまからのご寄付の「受領証明書」をお送りいたします。ご寄付の合計額は40億1707万4446円となり、前年同期比87.2%に減少となりましたが、これは東日本大地震津波遺児支援へのご寄付が約３割減少したことによるもので、日本の経済状況が厳しい中にもかかわらず他のご寄付は１割減にとどまっております。改めてみなさまのご支援に深く感謝申し上げます。大切に使わせていただきます。

2015年中にみなさまから寄せられましたご寄付額（2015年1月～12月）は次のとおりです。

・あしながさん奨学金	14億9387万8039円	(昨年比110.5%)
・使途を限定しない一般寄付	12億5973万8460円	(昨年比68.9%)
・虹のかけはしさん	1億　994万1333円	(昨年比97.8%)
・海外遺児支援	4億5971万　405円	(昨年比145.6%)
・その他	1362万　362円	(昨年比115.8%)
・東日本大地震津波遺児支援関連	6億8018万5847円	(昨年比69.1%)
合計	40億1707万4446円	(昨年比87.2%)

人権や教育を重視するNGOとして米国の「エレノア・ルーズベルト・ヴァルキル勲章」受章

冒頭でお話しいたしましたが、10月18日に、学生募金とご支援者のみなさま、遺児のために半世紀に亘ってあしながが運動にたずさわったすべての方々に、日本人としては元国連難民高等弁務官の緒方貞子氏に次ぎ米国の「エレノア・ルーズベルト・ヴァルキル勲章」をいただきました。受章の理由は、日本の遺児９万５千人の進学を支え、さらにアフリカ遺児高等教育支援100年構想に取り組んでいることです。

エレノア女史は人間の尊厳をおびやかすものは許しませんでした。また、氏素性や人種、宗教、貧富の差に関わらず「頑張れば教育を受けられる権利」を平等に持つことを国連の「世界人権宣言」でも明らかにしました。宣言に至るまでの道のりは決して楽ではなく、女史は国連加盟の多くの国と一つひとつの条項を話し合い、その起草者の真ん中にいて粘り強く反対者と交渉して完成させたのです。そしていま、エレノア女史は米国の新しい紙幣の肖像の候補になっているとのことです。

私たちあしながファミリーは、この勲章受章によって、「人権」や「教育」を重視するＮＧＯであることを顕彰され立証され、「あしなが」を国際社会の一員に押し上げていただきました。50年間あしなが運動に参加されたすべての人にとって、これほどの喜びはありません。

私ごとで恐縮ですが、私自身もこの半世紀様々な障害をはね返し、感性と愚直を旨としてその場で踏ん張り前進を止めませんでした。これからの私は、さらに高い理想を掲げ、何が起こっても後退しない生き方ができると思います。年齢は人を老い込ませますが、高い理想と信念と不屈の行動力を持って、死ぬまで迷わず、挑戦と前進を止めず運動を継続していきます。悪くなり続けるとも思える現代だからこそ、自ら信じることを高く掲げ、同志のみなさまと共に勇気をもって前進していく所存です。ぜひ、みなさまにもご一緒に歩んでくださるようお願い申し上げます。

米国ニューヨーク州「エレノア・ルーズベルト・リーダーシップセンター」のクリストファー・ロルキー理事長から同勲章に玉井義臣会長をノミネートした手紙（2015年4月）

この勲章は、エレノア・ルーズベルト女史のライフワークであった教育、弁護、社会正義、人権問題の分野において、世界的に人道支援活動への多大な貢献をした人が受章するものです。エレノア女史はその生涯を通じて、氏素性や人種、宗教に関わらずすべての人に機会と社会正義が与えられることをめざし、たゆまぬ努力と援助を惜しみませんでした。子どもの幸せに熱心に取り組み続けた女史は、あなたが提唱する「暖かい心、広い視野、行動力、国際性を兼ね備え広く人類社会に貢献するリーダーの育成をめざす」という理念に確実に賛同したに違いありません。

あなたのリーダーシップのもと、あしなが育英会は世界中の遺児たちに教育的精神的サポートを提供してきました。例えば、アフリカのウガンダにエイズ遺児の教育と精神的サポートのためのレインボーハウスを建てました。さらに、「親を亡くした子どもたちを貧困の鎖から解き放ち、教育によって貧困、堕落、搾取といった社会悪と戦うリーダーに育てて母国に戻すことを目的とした「アフリカ遺児高等教育支援100年構想」プロジェクトもあります。加えて、若い遺児に奨学金を与えると共に心の教育の「つどい」を各地で行っています。

私たちは、あしなが育英会の創立者・会長であるあなたこそ、エレノア女史の生涯と遺志を継ぐにふさわしいと確信し、この勲章をあなたに差し上げることを、この上ない名誉と考えます。

過去に、このエレノア・ルーズベルト・ヴァルキル勲章を受章した人物には、ヒラリー・クリントン（元国務長官、元米国大統領夫人）、ポール・ファーマー（ハーバード大学医学部卒業後、ハイチで医療活動実施中）、緒方貞子（元国連難民高等弁務官）、ヨルダンのノール女王陛下などそうそうたる方々がおります。

東北レインボーハウス竣工から2年、東日本大震災遺児の癒しと教育支援、本格的に始動

東日本大震災から３年後の2014年、国内外から寄せられた多くのご支援により、仙台、石巻、陸前高田の３か所にレインボーハウスが完成し、昨年2015年は阪神大震災遺児家庭も含め震災遺児家庭同士の出会いと交流を広げ深め、かつ心の癒しのために60回以上のプログラムを実施しました。ただ遺児にとって心のケアだけでは十分とは言えず、セルフエスティーム（自尊感情）を尊重し自信を持たせ、自分自身で努力するように仕向けていくことが大切だと考え、教育的支援にも取り組んでいます。

なかでも、力を注いだのは海外研修です。一つはオーストラリア研修。キャンベラ豪日協会のご協力で2012年から毎年春休みや夏休みに約20日間実施し、参加した遺児中高生の昨年までの累計は22人になりました。二つめは、ニューヨーク育英学園の招待で同校のサマーキャンプに2013年から毎年遺児小学生２人ずつが参加し、現地の日本人小学生との交流やホームステイをしていること。三つめは、昨年からですが、米国サンディエゴの日本人有志が遺児大学生２人をホームステイに招待してくださるなど、ご協力者の輪が広がっています。海外体験をした遺児たちは、学校生活にも前向きに取り組むようになり、夢や希望に向かってがんばっています。

ただ、東日本震災遺児や遺族には、津波にさらわれた親や家族がいつか帰ってくると信じているケースもあり、レインボーハウスによる一律のプログラムでは対応しきれないという大きな問題を抱えています。そこで、昨年は被災地の子どもを支援している他の団体との連携づくりに力を注ぎました。仄聞（そくぶん）したところでは、阪神大震災被災者は６年後に第二の精神的経済的どん底に陥ったとのことです。東日本大震災から今年で５年目、様々な問題が深刻化していくのではないかと懸念されます。何卒、一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

あしながインターンシップ・プログラム生、日本の遺児とアフリカ遺児のために大活躍

昨年は、学生募金が世界に広がった記念すべき年でもありました。

２年前の2014年に本会の「第１回インターンシップ・プログラム」に参加したオサマ・オグベイデ君（米国・ヴァッサー大学生）の呼びかけで５月23日、アフリカ遺児高等教育支援のための街頭募金を世界13都市（パリ、ニューヨーク、ボローニャ、エディンバラ、バルセロナ、ロンドン、オックスフォード、ロサンゼルス、サンフランシスコ、シンガポール、香港、東京、那覇）で一斉に行ったのです。オサマ君の呼びかけに賛同した第１期インターン生ＯＢ11人が母国（アメリカ、イギリス、フランス、イタリア、スペインなど８か国）で友人らに輪を広げて実現しました。東京から世界に広がった募金風景を画像で見ると、その街の特色ある場所をうまく活用し、方法も手法をこらし、街頭を通る市民や観光客ににこやかに受けいれられていました。外国にはない街頭募金を学生らが実現し支持者が増えれば、世界募金の様相が一変することでしょう。世界の若者がＩＴなどを駆使し、アフリカの遺児のために募金イノベーションを見せてくれることを大いに期待しています。あしなが運動の先頭に立つのはいつの時代も若者でした。若者の力は偉大です。

昨年の第２期インターン生100人も、特に、全国９会場で開催した「高校奨学生のつどい」と山梨県西湖での「大学、専修・各種学校奨学生のつどい」で大活躍してくれました。彼らが日本の遺児たちにどんな影響を与えたかについては下記にご紹介する日本の遺児の声に代えたいと存じます。

△つどいに参加するまであきらめていた夢を、周りの夢に向かってがんばる人を見て、また追おうと思った。人見知りな私でも、海外からのインターン生と話すことができ、うれしくて人見知りも治ったように思った。来年も来たいです。（高校生・女子）

△インターン生から「開けた扉は閉めずに新しい扉を開ければ、その先が暗くても過去に歩んできた光が差し、前に進むことができる」という力強い言葉をもらえた。（大学生・男子）

インターン生自身からも「友情は言葉のみによって作り上げられるものではないということに気付けた」「私も遺児だが、本当に幸せを感じるときは、君たちのような仲間を見たときだ」など、日本の遺児との交流を通じて深く感動し、成長の糧を得たという感想を多く聞きました。

遺児のみならず日本の若者の内向き志向は教育界でも大きな問題になっていますが、いまや日本だけで仕事をして日本人だけに囲まれて生活するという時代は遠い過去のこととなりました。遺児の視野を広げ国際社会の中で志高くたくましく生き抜いていくことを願い、少なくともあと３年は、このインターンシップ・プログラムを継続したいと考えております。

アフリカ遺児高等教育支援100年構想事業が劇的に加速、アメリカにも拠点開設

私は今年２月６日で81歳になりますが、私の本当の人生は1961年12月24日から始まります。この日、母は永い眠りにつきました。その36日前、母は交通事故で頭部外傷を負いました。しかし、日本に脳外科医がほんどいなかった当時のこと、母は何の治療も施されることなく、ボロ雑巾のようにほったらかされたま

ま死んでいったのです。「かあちゃんのかたき、わいが必ず討ってやる」と誓ったあの日、私27歳、母はまさに命がけで、私のそれまでの無頼の人生に別れを告げさせてくれ、まるっきり別の人生を一生懸命生きさせてくれました。母を死に至らしめた自動車行政を告発した交通評論家人生、地球の環境と資源を守ろうと「ユックリズム」を提唱したミニ哲学徒時代、遺児と共に48年･･･。並の苦労と努力ではありませんでした。しかし、私の原点はやはり母の枕辺で怒り、泣き、疲労こんぱいの中でかたき討ちを誓ったことです。やがて私憤は公憤となり、いま私はアフリカの遺児のために世界の人々の心に協力を呼びかけています。

そんな必死な思いで取り組みだした「100年構想」ですが、当初は一部から「なんでアフリカなんだ」との批判も受けました。しかし、エレノア・ルーズベルト勲章受章により、賛成してくださる方が大多数となり、昨年は進展速度が劇的に加速しました。以下、ランダムにご報告いたします。

(1)アフリカ遺児、津波遺児、米国ヴァッサー大生のコラボ音楽公演「世界がわが家」満員御礼 ― 6月に本会と米国ヴァッサー大学の共催で、ニューヨーク、ワシントンＤＣ、東京の３会場で行ったコラボ音楽公演は全会場、観客総立ちのスタンディングオベーションで鳴りやまぬ拍手を浴びました。この公演は、境遇の違いに関係なく、すべての子どもに等しく教育を受ける機会を与えることが世界をよりよくすると訴え、「100年構想」への理解を深め支援を呼びかけるものです。今年８月には、ケニアのナイロビで開催されるＴＩＣＡＤ（アフリカ開発会議）に集合したアフリカの全元首の前で公演することが確実となりました。この公演が成功すれば、「あしなが」は全アフリカに広がり、「100年構想」の大躍進につながることまちがいありません。

(2)「賢人達人」25か国72人に ― 私は「100年構想」実現のために、国際的な影響力を持つ方々をアドバイザーとして「賢人達人会」という諮問機関をつくりました。「賢人」とは、世界と当該国の問題に明るい知識人で、国民的支持をもち、その国を代表する「知性」である方。「達人」とは、各分野でその道を究めた国民的世界的人気のある方で、スポーツ選手や俳優、芸術家などです。100人を目標に呼びかけておりますが、現在25か国72人となり、あともう一歩です。ワシントンＤＣでの「コラボ公演」翌日の６月13日に賢人達人の総会が初めて開催され、３時間半に及ぶ白熱した議論が交わされました。メンバーにはルイ・シュバイツァー氏（フランス・元ルノー会長）、アンドレア・ボチェッリ氏（イタリア・歌手）、シーナ・アイエンガー氏（アメリカ・コロンビア大ビジネススクール教授）などで、日本人では日野原重明氏（聖路加国際大学名誉理事長）、野依良治氏（ノーベル化学賞受賞者）、小澤征爾氏（指揮者）、孫正義氏（ソフトバンク代表取締役）、さだまさし氏（歌手・俳優・作家）など、頼もしい方々にご協力いただいております。

(3)「100年構想」第1期生進学、後に続く第2期生猛勉強中 ― 2014年に採用したアフリカ遺児「100年構想」第１期生10か国10人は、昨年、全員みごとに世界各国の大学に進学しました。７人が英国、米国とブラジルと日本に１人ずつです。そして、第２期生25人も先輩に続けと、「あしながウガンダ心塾」（2015年７月竣工）とセネガル仮設心塾とに分かれて猛勉強中です。ウガンダでは英語圏の大学進学希望者、セネガルではフランス語圏の大学進学希望者が合宿し、本会の外国人職員やインターン生から指導を受けています。彼らはみなハングリー精神旺盛で志が高くめきめき力をつけており、今年どんな大学に合格するか、とても楽しみです。

(4)「あしながアメリカ事務所」開設 ―「100年構想」の資金を募るため10月21日、米国ワシントンＤＣに「あしながアメリカ事務所」を開設しました。ここでカナダも含む北米と大学との連携を緊密にとりながら、アフリカの遺児の入学や奨学金の交渉はじめ、募金活動の盛んな米国で広報を重視し、より多くのアフリカ遺児の進学を支援するためのファンドレイジングの拠点にいたします。なお、「あしながアメリカ」は、米国の「内国歳入法典第５条Ｃ項３号」規定が適用され、米国内での寄付控除が受けられる団体として承認されました。早くも世界的な大企業から関心を寄せていただいております。

他にも縷々ございますが、紙幅の都合により割愛させていただきますことをお許しください。詳しくは同封いたしました「あしながニュース」をご一読くださいませ。寒さ厳しき折、みなさまにはくれぐれもご健勝であられますことをお祈り申し上げます。本年も遺児支援のため何卒よろしくお願いいたします。